

PACIS 2018 Yokohama 開催報告

妹尾 大 (せのお だい)

東京工業大学工学院

田名部元成 (たなぶ もとなり)

横浜国立大学大学院国際社会科学研究院

1. カンファレンスの概要

PACIS 2018 Yokohama (The 22nd Pacific Asia Conference on Information Systems) が、2018年6月26日から30日にかけて、横浜にて開催された。主会場は、横浜ロイヤルパークホテルおよびTKPガーデンシティ PREMIUM 横浜ランドマークタワーであり、両会場とも横浜ランドマークタワーという単一の場所で行われた。

大会テーマは、ビッグデータ、人工知能、IoT、ロボティクスといった新技術が日進月歩で進化し、急速に社会に浸透していくデジタル社会を見据えた経営情報学のあり方を見直そうという意図のもとに、“Opportunities and Challenges for the Digitized Society: Are We Ready?”と設定された。発表申込総数は、PACIS 史上最多の759件を数え、本テーマおよび開催国日本への強い関心が瞭然となった大会であった。大会参加登録者は、38ヶ国523名(内、日本からは41名)であり、併設会議として開催された経営情報学会全国研究発表大会の参加登録者101名と合わせると、合計624名が横浜に集い、活発な交流と議論が展開された。

今回で第22回を迎えたPACISは、国際情報システム学会(AIS: Association for Information Systems)のアジア太平洋地域(Region 3)内で毎年開催される国際会議である。なお、AISの他の地域における国際会議には、アメリカ大陸(Region 1)のAMCIS(Americas Conference on Information Systems)および欧州、アフリカ、中東地域(Region 2)のECIS(European Conference on Information Systems)がある。また、AISが主催する世界全体での国際会議ICIS(International Conference on Information Systems)は例年12月に、上記3地域の持ち回りで、順次開催されている。

最近のPACISは、アジア太平洋地域はもとより、

世界中から研究者・実務家の参加が増加し、年々規模が拡大している。

2. 研究論文の申込みと採択

投稿論文は、CRP(completed research paper)とRIP(research-in-progress)の2タイプに分けて募集した。CRP(予稿は14ページ以内、口頭発表)へは456件の申込があり、採択されたのは197件(採択率43%)であった。また、RIP(予稿は8ページ以内、ポスター発表)へは280件の申込があり、採択されたのは121件(採択率43%)であった。ドクトラル・コンソーシアムへは23件の申し込みがあり、最終的に21件のポスター発表が実施された。

合計で19個の研究トラックに対しての発表申込総数759件がPACIS 史上最多であったことは上述したが、著者総数はさらに多く、発表登録をした著者(共著者含む)は、世界53ヶ国1755名であった。発表登録者数上位国は、次の通りである(括弧内は著者数)。China(375), Australia(218), Taiwan(202), Malaysia(116), United States(102), Germany(83), Hong Kong(78), Japan(57)。なお査読者総数は968人であった。

3. ドクトラル・コンソーシアム

大会1日目の26日午後と2日目の27日全日の1.5日間でドクトラル・コンソーシアムが開かれ、海外から学生21名とメンターおよびチェア9名の合計30名が参加した。

AISフェローのSuprateek Sarker氏の基調講演、メンターたちによるパネル、参加学生による発表と指導(グループに分かれ、学生ひとりにつき45分間を確保)を行った。会議場所はTKPを、宿泊場所は横浜みなとみらい万葉倶楽部を利用した。初日



写真1 足湯に入り夜景を楽しむDC参加者たち

夜には万葉倶楽部で懇親会を開き、食後は夜景を楽しみながら足湯で歓談するなどして、親睦を深めた。

4. 基調講演

基調講演は、大会3日目の28日午前中と4日目の29日午前中に横浜ロイヤルパークホテル3階の大会場で実施された。28日は、9:30より一橋大学名誉教授の野中郁次郎氏による講演が行われ、ひきつづき10:00から日産自動車株式会社総合研究所所長、アライアンス・グローバル・ダイレクター（理事）の土井三浩氏による講演が行われた。29日は、9:30よりヤマトホールディングス取締役会長の木川眞氏による講演が行われた。なお、日本語による講演者に対しては、聴衆にヘッドセットを配布して英語での同時通訳を提供した。

5. ワークショップ等

パネル・ディスカッション2件、ワークショップ2件、チュートリアル1件は、TKPで実施され、それぞれのテーマに関心を持つ聴衆が集まった。国際研究論文誌への投稿に関するワークショップには、併設会議（経営情報学会全国研究発表大会）の参加者にも参加の機会が与えられた。

ポスター・セッションは、横浜ロイヤルパークホテル3階のホワイエで、28日と29日に合計5回のポスター・セッション時間帯を設けて実施された。



写真2 ポスター・セッションでの発表の様子



写真3 ガラディナーの様子

各発表者がそれぞれの研究を説明するポスターを作成し、ボードに貼りつけたポスターを用いながら聴衆からの質問に答えていた。ポスター前の立ち話での活発なやり取りに加え、ボード裏のソファに座り込んで、じっくりと議論する様子も見られた。

協賛企業の冠がついたイベントとして、27日夜にはウェルカムレセプション（コクヨ）、28日昼のランチ（NTT DATA）、29日昼のランチ（野村総合研究所）、29日夜にはガラディナー（構造計画研究所）が開催された。いずれも料理の質が高く、参加者の満足度の高さを示す声があちらこちらから寄せられた。

6. カンファレンスの運営上の特徴

PACIS2018 実行委員会では、今回の大会を運営する際の目的として、研究者のネットワーキングの機会を最大限に高め、世界的規模での経営情報学の発展を促すことを掲げた。すなわち、将来、各種の研究成果が実を結んだとき、その研究の発端が横浜

で開催された PACIS2018 だったと言われるような大会になることを目指した。この目的を共有したことは、プロジェクトとして準備を進めてきた実行委員会にとって、しばしば直面する難しい問題解決意思決定において有効であった。

PACIS の横浜招致が決定したのは、2015 年にシンガポールで行われた PACIS2015 におけるアジア太平洋地域 (Region 3) の理事会であった。PACIS2018 の実行委員は、その直後から PACIS と ICIS での積極的な広報に務めた。今回のカンファレンスで PACIS 史上最多の発表申込数を獲得することができたのは、このような地道な広報活動の結果だと思われる。

今回のカンファレンスの運営において特徴的な点を以下に挙げる。

- PACIS が学術的に水準の高い国際会議としての地位を確立できるよう、過去の大会に比べて採択率を厳しく設定し、完成度の高い論文のみを発表対象とした。
- 宗教的な理由や個人の食習慣・アレルギーなどに対応する食事を用意したり、礼拝室を設置したりするなど、参加者個人の多様性や要求に最大限配慮した。
- 商業的理由による観光資源の過剰な演出やパフォーマンスは避け、横浜という洗練された都市空間を演出し、学術集会としての実質的な成果に注力した。
- Twitter や Facebook といった SNS を活用し、最新のニュースを参加者と共有するように努めた。
- 論文投稿システムには投稿者の慣れを考慮して、ここ数年使用されている EasyChair を継続して使用することとした。なお、近年、目にするが増えた大会用スマホアプリの導入はコスト面を考慮して採用しなかった。
- アジア太平洋地域 (Region 3) の理事会からの強い要請を受け、参加費のディスカウントを断行した。アカデミックの早割で 70,000 円だった参加費を 66,000 円に値下げした。
- 特定の大学や研究室ではなく、経営情報学会をベースとした研究者コミュニティを基盤として実行委員会を構成し、準備と運営にあたった。

- 公益財団法人横浜観光コンベンション・ビューローからは、招致直後 (横浜開催決定後) から会場選択や各種手配など全般にわたって、有益なアドバイスを受けた。

7. おわりに

今回、2002 年東京大会以来 16 年ぶりに、日本での PACIS 開催が成功裏に実現できたことは大変喜ばしく、協賛企業はじめ多くの関係者・組織のご支援の賜と、PACIS2018 実行委員を代表してこの場を借りて御礼申し上げます。

PACIS では、アジア太平洋という巨大なビジネスマーケットを対象とする世界中の研究者が集まって、日進月歩で進む経営情報システムの最先端課題についての分析を行い、経営情報学と実務への両者への貢献を行なっている。日本における情報システムの研究と実践の優秀さを世界に認知してもらい世界的規模で貢献するためにも、世界の先端的な取り組みを日本での実践に取り入れ学術レベルを向上させるためにも、また、アジアの優秀な人材を獲得していくためにも、今後も継続的にこのような大会を日本で開催し、発信力を高めていくことが重要だと思われる。そのような意味から、今後は ICIS の日本招致に向けて動き出すべきだろう。

略歴

妹尾 大 (せのお だい)

1998 年 3 月一橋大学大学院商学研究科博士後期課程単位修得退学、1998 年 4 月北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科助手、2002 年 6 月東京工業大学大学院社会理工学研究科助教授、2017 年 4 月東京工業大学工学院教授

田名部 元就 (たなぶ もとなり)

1998 年 3 月東京工業大学総合理工学研究科博士後期課程修了。博士 (工学)。1998 年横浜国立大学経営学部講師、1999 年同助教授、2012 年横浜国立大学大学院国際社会科学研究所教授、2015 年 4 月情報基盤センター長 (併任)、現在に至る。